

松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全32回--28

2023年11月

写者

小原靖夫

第28回

神に喜ばれる生活の実践と奉仕

第13章①節から⑥節

神に喜ばれる奉仕

- ①兄弟としていつも愛し合いなさい。
- ②旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。
- ③自分も一緒に捕らわれているつもりで、
牢に捕らわれている人たちの思いやり、
また、自分も体をもって生きているのですから、
虐待されている人たちのことを思いやりなさい。
- ④結婚はすべての人に尊ばれるべきであり、
夫婦の関係は汚してはなりません。
神は、みだらな者や姦淫する者を裁かれるのです。
- ⑤金銭に執着しない生活をし、今持っているもので満足しなさい。
神御自身、「わたしは、決してあなたから離れず、
決してあなたを置き去りにはしない」と言われました。
- ⑥だから、わたしたちは、はばからずに次のように言うことができます
「主はわたしの助け手。
わたしは恐れない。
人はわたしに何ができるだろう。」

ヘブライ人への手紙も13章、いよいよ最終章に至ったわけですが、当初、短くて簡単だからこれはすぐ終わるなど思いながら、準備を始めました。

ところが、13章だけで、二回どころか三回、四回でも終わりそうもない、濃密な内容が満載されていることに気づきまして、本当に頭を抱え込んだわけです。

それについて、先ず、色々な注解書が「この13章は、後から付け加えられたのではないか」と述べております。その理由は、これまで細かく述べられてきた事柄の総括として、「神

に喜ばれる奉仕」という小見出しがつけられています。その言葉にこそ、著者がこの手紙で言わんとする内容のすべてがギュッと詰め込まれているからだと言うのです。

そのようなことは、色々な福音書が書かれた後にも、新しい気づきや発見を順序立てて、できるだけ手短かに書き加えて、福音書のまとめをしようと考えた編集者があったのです。それと同じような形式ですが、この手紙には「総括した上で、もう一度皆に提示したいある特別な意図があって、この13章が書き加えられたのではないか」ということが、後世の加筆であろうと推測されている所以です。

確かに12章までは、延々と一つの事柄について丁寧な説明をし、それを旧約聖書の言葉をもって裏打ちし、という格好で話が進んで来たのに対し、13章では全く短い単語がポンポンと置かれているだけで、それによってメッセージを送るという新たな形式をとっています。ですから、その流儀から言えば、他の人が書き加えたものとしてもおかしくはないのですが、だからと言って、他の人の加筆と言えるような積極的な証拠はどこにもありません。

原典で読んでも、ここに特別な言葉が使われているわけではなく、ただ、後世の加筆説を唱えた学者の何人かは、「この書簡が軽く扱われないために『重さを増し加える必要』があり、それには、パウロの手紙が当時の教会で非常に重んじられていたので、この手紙にも『パウロとの関連を残したいという意図』をもって、ここに付け加えたのであろう」という見解をもっています。それほど、この13章に至っては、他のところでははっきりとは見えなかった「パウロ的な発想」が沢山組み込まれているのです。

律法に精通していたパウロは、イエス・キリストに出会うことによって「律法は、直接神の義に導くものではないが、罪の自覚を生ぜしめてキリストへと導く養育係だ」と考えるようになったのです。13章でも、そういう部分が出ている反面、この先、何回か出て来る「(キリストの)恵み」という言葉が重要な位置をしめているのにお気づきになるだろうと思います。

パウロに関連して色々な総括の仕方がありますが、一つの言い方をすると、「恵みの使徒」と呼んでもいいほど彼は「恵み=カリス」という言葉を繰り返し、繰り返し使っているのです。パウロの手紙（現在、真筆と認められている7つの書簡；ロマ書・第一コリント書・第二コリント書・ガラテア書・フィリピ書・第一テサロニケ書・フィレモン書）の中には「恵み」という言葉が62回出てきます。ですが、新約聖書全体では130回しか出て来ないので、パウロがその2分の1を使っていることになります。

ですから、パウロは「自分の専門用語」として、この『恵み』という言葉を使ってきたのだと言うことができるのです。そうした「恵み」という言葉が非常に重要な意味をもって、この13章にも登場して来ます。そうした意味でも「13章は、パウロと関連付けるために付け加えられたのであろう」という鋭い見方があるのです。

以上から、今までとは書き方の流儀が違いますから、少し変わったアプローチをしなければいけないこと（私が悩み果てた理由）がお分かり頂けたらと思います。

第①節、
兄弟としていつも愛し合いなさい。

のっけから、このひと言で終わりです、何も説明がないのです。

しかも、これで一つの条項をきちんと述べているわけです。ですが「兄弟としていつも愛し合いなさい」という言葉に、もうちょっとニュアンスを付け加え、「兄弟愛をもって互いに仕え合いなさい」という他訳もあります。

この「兄弟」というのは血縁の兄弟(だけ)ではありません。「兄弟愛=フィラデルフィア」という言葉には、「フィリア=愛、自分自身を献げ尽くして愛する愛、そういう自分にとって親しく価値あるものに対して自分が畏れをもって仕える愛」という意味が含意されています。

ギリシャ語の愛の表現としては、アガペーとかエロースとかフィリアなどがあって、ヨハネによる福音書21章では、イエスがペテロに「あなたはわたしを愛しますか；アガパース　メ？」とお尋ねになる。するとペテロは、その問いかけに対してストレートに「アガパオー　セ」とお答えすることができなくて、「フィロー　セ」とお答えする。そうしたイエスとの問答が三回続くということになります。227

そのシーンを少し詳しく述べれば、「アガパース　メ？」と問われる主への返答に、ペテロは、アガペー（その人の価値の如何に拘わらず、包み全うする無償の愛）を用いるのを躊躇し、フィリア（私にとってあなたは価値があるから、そのあなたに全身全霊を献げて仕えてゆく愛）を用い、彼としては主という御方を弁えて答弁したつもりだったのです。

ですが、イエス御自身はあくまでも、そのフィリアでなく、「価値があろうがなかろうが、わたしを愛しますか？」という高次の愛アガペーを彼に求められて、お尋ねになったという辺り、両者の思惑は、ボタンの掛け違いのように、かなりずれてしまっています。そうして三度目には、主の方が折れ、ペテロの思いを理解し受け留めようとされて「フィレイス　メ？」と、改めてペテロに尋ねてくださったのです。が、その時のペテロには、そんな主の深い御心が伝わっていなかったもようで、彼は、三度目も同じようなトーンで「フィロー　セ」とお答えしました。（この掛け違いがあったやりとりについては、後のペテロ自身の証言によって、ヨハネによる福音書に記されているのです。）

そこに出て来るフィリア、フィレオーという言葉も、「フィラデルフィア」という言葉と関連し、「かけがえのない存在である兄弟として愛し合う」というニュアンスがそこに盛り込まれているのです。

またもう一つ大事な部分は、「いつも」という言葉です。

原典には「いつも」はなく、持続、継続を表す動詞が用いられ、それが『いつも』という意味を擁しており、「いつも相手を価値あるものとして愛し続けなさい」という言い方をしているわけです。この言葉を分析すると、「あなたがたにとって、互いの状況に関係を保つに難しい変化があっても、愛し続けなさい」と告げています。

ところで、教会とか信徒の交わりは、一般社会では「すごく清められたものだ」というイメージが持たれていますね。ですが、教会生活を長くしている本人たちはそういったイメージをそれほど強くは持っていません。反って「教会の交わりは良いものだが、時に、難しいものともなる。」と感じている人が多いだろうと思います。

そういうことに対してこの著者は、「教会は、神の御前にあなたがたが一番自由にされ、裸になって自分をさらけ出せるような教会生活を送れる交わりを持っているところだから、良い面のみならず嫌な面も見えて来る、受け入れ難い状況が生まれて来ることもある。けれども、相手を(主に在って) 価値あるものとして愛し続けなさい。」と勧められています。

「憐れむべき者、気の毒な人だからとか、弱さを抱える人だから、助けてあげるために愛しなさい」というのではないのです。

「この目の前の相手を価値ある者として愛し続ける」ということが、ここで言われている「兄弟としていつも愛しなさい」という言葉の中にある大切なものなのです。これは、読み過ぎてしまいがちな言葉ですが、決して軽くない言葉です。

そして、「価値あるものとして」と、私があえて何度も申し上げましたのは、次のような理由によるのです。

教会が、迫害や世の中の異文化の波に晒されているような危機には、私たちは一致結束して対応しなければならない、一つでなければならないと考えます。ですが、そうやって来ますと、教会の中にも時には不協和音が鳴り出し、互いに「イエス・キリストを信じる信仰」と唱えていながら、どうも信仰の視点がずれているという感覚や、あの人の信仰における見解は正しいだろうかという疑念、疑惑めいたものが生まれて来ます。更には、あの人の言っている信仰上の主張は間違っている、教会の正統的、伝統的信仰はこうであるべきなのに、などと裁断し、陰で批判し合ったりします。

それは、信仰上の防衛や、教会共同体としての防衛であったりすることは認めても、正しい在り方とは思えません。しかし、イエス・キリストのご生涯を考えますと、そんな自分たちの信仰共同体が内外の両面から攻撃された時に「一点の非の打ちどころのないような完全なものに造り変えよう」などと、イエスはなさらなかったのです。

「むしろ、違いがあるから、意味があるのだ。皆が違う考え方を持っているからこそ、多様な考え方が共有できるのだ。そして、それらの人々を、神が（にも拘らず）愛し続けて

いらっしやる。その御愛があるからこそ、この自分も愛し救われているのだということを改めて受けとめ直して、生きて行けるように。」と、主は弟子たちを訓練なさった。

ガリラヤにおられた時にも主はそうなさった。ヨハネによる福音書21章では、ペテロに対してイエスが愛の問答をなさった後、何とか再び主の後について行けるようになったペテロが、今度はヨハネを気にして、「彼はどうなのですか？」と聞く場面があります。すると主は「あの人はあの人でいいじゃないか、あの人にはあの人の使命があるんだから、あれでいいんだよ。それは、きみがわたしのものとなって仕えて行くこととは、何の関係もないんだよ。」と仰った。

イエスにとっては、「ペテロのような信仰もヨハネのような信仰も、もっとも弱い信仰も、あるいは、もっとも違った形で表現されている信仰も、かつては理が勝っていたトマスのような在り方も、皆其々にかげがえのない価値を持った神の大事な宝である」というスタンスで、弟子教育に臨まれたように、私たちもむやみに排他的な行動は慎んで、「イエスはこの人をも愛しているのだ」という主の御思いに倣って関わり続けていきなさいと、著者は述べているのです。

小声で言えば、違和感のある人と無理に関わるより、距離を置く方が楽ですよ。あの人と私とは考えが違うから関わらない、ということにしてしまった方が楽なのです。けれども、「そういう人こそ、神の御愛のうちに置かれているのだと信じて、その人と関わりを持ち続けていきなさい」と、主は言われています。

その裏返しで、関わり続けることの反対は、当人を疎外することであり、更には、いじめ、切り捨て、排除することであるわけです。現実にイエスの御教えも、それを聞いて、自分たちの正当性や価値を高めるためには有益でないと判断した人々からは、イエス御自身が甚く排斥され、疎外されました。

「教会がそういう群れにならないで、共に受け入れ合って歩んでゆけるような、主に在る交わりを保ち続けなさい。」この勧告はすごいことだなと思います。

しかも、「そういう人々は未熟で、育ててあげないと駄目だから、我慢して育てましょう」じゃ駄目なんです。ともかく「教会の未来への宝」として目をかけ、心をかけ続けるのです。ですから、①節の言葉だけでも「ものすごい教会論」が出て来るわけです。

この箇所はポンと短い言葉で置かれているから、サラッと読み過ごして「ああ、当たり前のこと言っている」と見做してしまうと、実はこの手紙の中で言わんとしていることが、全然見えてこなくなるのではないかと、思います。

私たちが互いを愛するのは「キリストがその人を愛されたのだから、私も愛する」というキリストへの信頼と倣いからです。つまり、キリストが命をかけて神の宝の民としてくださった存在であるのだから、私たちもこの人の価値を認め、共生し合ってゆこうという

「キリストの御心へと向かう強い意志」がないならば、はっきり言えば、教会の交わりというのは本当に脆いですよ。

私たちはよく「同じ信仰を持っているから」などと簡単に言いますが、同じ信仰って一体何なのなのでしょう？ 同じ思想、同じイデオロギーだからということが根拠ならば、そんなものは脆いですよ。自分側に利害関係が生じた場合には、そんな根拠は、すぐに崩れ去ってしまうようなものです。

自分たちの教会を考えた時、一体どうだろう？ 相互の存在価値を認め合う集団になっているだろうか？ なかなかそうはならないですね。それは、そこにイエスの愛が息づいていないからであって、価値を認め合って愛し合う集団は、そこに、イエスの愛が息づいているのです。それは「イエスが（どういうわけか）私やあなたを愛してしまわれたのだから、私たちも、そのように他者を愛する者になろうよ」という共通認識がちゃんとあるからなのかも知れません。

① 節のことばかりでおしまいになるといけませんから、次にまいりましょう。

第②節

旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。

② 節も一つのことをまとめて語っておりまして、これも、私たちの教会の基本的な姿勢を質している部分だと思えます。

教会という集団は、敬虔な感情とか、神を讃美する言葉とか、そういうもので共通認識を整えられて歩んでいる群れであることは、間違いありません。けれども、それだけではなく、具体的な「愛情に満ちた行為」がきちんと示されるような集団でなければいけません。233

① 節は「仲間たち」のことでしたが、②節は「外側からの旅人」という関係性で出てまいります。「旅人をもてなすことを忘れてはいけません」の「もてなすこと」は、ギリシャ語は「フィロクセニアス（複数形）」という言葉です。この言葉は、実はさっき述べた「フィレオー」という言葉が頭に来ている類縁語で、「あなたがたにとって価値ある方として」という意味なのです。

因みに、この「フィロクセニアス」という言葉は、ラテン語から英語に変わっていく段階で「ホスピタリティ」という言葉になります。

今、私たちの社会では「ホスピス」というのは、人生の終わりを迎えた方々が、そこで心豊かに平安な時を過ごす特別な病棟をそう呼んでいます。が、実は「ホスピス」は元々旅人をもてなす場所で、元々は巡礼者のために宿を提供する場所だったのです。神を求めて来る者たちに、その旅や巡礼が継続できるように、自分たちが生きること喜びを感じられるように、宿を貸し、もてなしをする、それが実は「ホスピス」という言葉、「フィロクセニアス」という言葉なのです。

これを「手厚いもてなし」というように訳されている場合もありますが、「旅人を手厚くもてなさない」は、神への信仰を求めて人生の旅を経て来た人、巡礼者たちが、手厚いもてなしを受けて、心にも休養が与えられ伸びやかになり、更に目的に向かって力を受けて進んでゆける「拠点」が、「旅人をもてなす」という言葉の中にはあるのです。そして正にその意味で、「教会はフィロクセニアス」なのです。234

ですから、ここで、いわゆる古い時代の教会観から一步抜け出そうとしていることが分かります。これが書かれたのが、紀元80年代から90年代にかけてだと考えられていますが、初期の教会はそれまでイエスを信じる信仰の一致共同体を守っていたわけです。しかし、この段階に来ると、今度はそのイエス・キリストを求める外の人々をも受け入れ、彼らを巻き込んだ形で信仰に励むようになります。求道の旅をすることがいかに有益であり、人生にとって欠かすことのできない大切なものであるかを伝え、感じ取らせる場所、そこから立ち上がり、確信をもってイエス・キリストを求める歩みに力を与える場所、それが教会なのだというわけです。

言い換えれば、伝道的な教会と言いますか、そういう教会像がここに描かれ始められていきます。教会はもはや、地域で神を信じる人たちだけの「閉鎖的な仲良しグループ」ではない。外から来た人たちにも、彼らが神を求めるために有益な働きを為す所、彼らが心の平安を得て、自分たちがしようとしていることに価値があり、意味があり、素晴らしいことがよく分かり、勇気が与えられて立ち上がってゆく所なのだ。疲れ果てた人々が癒され、破れ果てた人々がその破れを償われ、新しい力を与えられて旅立ってゆく場所、それが本来の教会の姿なのです。

そして今は、巡礼者（求道者）＝旅人へのもてなしだけではなく、『主の日の礼拝』への招きというものが教会では重要な位置を占めています。主の日に向かって日々労苦の旅をしているクリスチャンたちも、地上の闘いに傷ついています。それゆえに、イエスを求めて生きていこうとする人々が教会に集まって神の御言を聞き、イエスの御恵みによって新しくされ、自分たちが歩んで来た道が、神の御導きの中にあっただということを再確認して、新たな力が与えられ、主の証しのための旅を続けてゆける。教会は、そういう仲間がもてなされる場所でもあるですから、「旅人を懇ろにもてなすことを忘れてはいけません」と、ここでは書いているのです。

私たちはともすると、自分たちに特別に与えられた信仰を何とかお互いに守り続けていこう、固くしてゆこう、高めてゆこうという内側のことに熱心になるあまり、仲間の外側での戦いを忘れてしまう危険性があります。けれども、あなたがた教会の民は「自分たちが一つであることに励む」と同時に、「教会は、外で戦い傷ついて帰ってきた仲間たちのもてなしのためにも、神がこの地上に作られた魂の憩いの宿であることを忘れてはいけませんよ」ということをここでは言っているわけです。

このように「教会生活をする」と簡単に言っている言葉は、「奥が深くて広いものがあ

る」と、この13章①節②節前半は、私たちに告げ知らせているのです。236

その後で、著者は、ちょっと付け加えます。

「そうすることで、ある人たちは気づかずに天使たちをもてなしました」と。
この辺は、ヘブライ思想の中での大事な問題を語ろうとしており、マタイによる福音書25章にもそのような思想が出て来ます。

「あなたがたの中の、いと小さい者の一人にしたのは、即ちわたしにしたのである。…あなたがたは、わたしが旅人であった時に宿を貸し、病気であった時に見舞い…」というような言葉がずっと続けていくわけですが、「知らないであなたがたはそうしました」と言うのです。すると「聞いていた彼らは言うであろう、何時わたしがそんなことをしましたか、何時あなたが病気でいらっしゃいましたか…」と尋ねる。言い換えれば、自分たちは特別な親切をしてきたつもりはなく、当たり前のことをしていただけなのに、それが実は、イエスご自身を受け入れ、お仕えしてきたこととされていたなんて！
そして、この「いと小さい者の一人にしたのは、即ちわたしにしたのである」の後に、イエスはもう一つ付け加えておられます。「いと小さい者の一人にしなかったのは、即ちわたしに対してしなかったのである」と。こちらは、厳しいお言葉ですね。

最後の審判で、右は羊、左は山羊と分けられる時に、「(わたしに対して) しなかった者は山羊、したものは羊として分けられる」と書かれていますが、正にそれは「終わりの日に向けて、調べられゆくべき私たちの信仰生活の姿なのだ」とこの部分では言っているわけですね。

ですから、このいとも短い①節②節の中に、「救いの問題、教会での交わりの問題、終末の時に向けての心の問題」が全部出て来ているのです。そのような幅広いものをこの短い言葉で書けた人はすごい人だと思います。幾ら頑張ってもなかなかこう「ひと言」では書けないものです。この著者の「そこに集中して、選ばれた言葉を持って来てその内容を豊かなものにしていく」あたりは、正にヘブライ人への手紙のまとめの部分にふさわしいところだなと感心致します。

第③節、

自分も一緒に捕らわれているつもりで、牢に捕らわれている人たちを思いやり、
また、自分も体をもって生きているのですから、虐待されている人たちのことを思いやりなさい。

この部分もすごく重たい言葉です。原典では、最初の所に強い語気で「思い出しなさい」とか「思いやりなさい」とか「想起しなさい」という訴えが、先ずあります。
原典直訳での③節前半は「思いやりなさい、牢に捕らわれている人々のことを、あなたも一緒に捕らわれているつもりで」という形の文章になります。何がここで大事かというと、「その人々を覚えること、思うこと、思い起こすこと」と言うことができます。238

当時のクリスチャンたちは、御言葉を宣べ伝えたり、あるいは信仰をもっているだけの理由で投獄された人々のために、祈り、獄屋を訪問して差し入れをし、その人々を助けるために募金をし、更に、お互いの物を提供し合っってその人のために用いたりするような、具体的な支援活動を積極的に行っていました。

「あなたがたも信仰をもって生きているけれども、現実には肉体をもって生きているから、痛いことも辛いことも苦しいこともあることが、分かるでしょう。」と、イエスは「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」ということを語られたのです。

そういう喜怒哀楽の感情、あるいは私たちが辛いとか痛いとか、厳しいとか苦いとかを感じるような五感の感覚、そのすべてを皆もっているのだから、（そういう五感の感覚が無い人のように白けた目で他人事と見做し、自分は高みの神の福音に生きるというのではなく、）「その辛さの間に滲み込んでいるイエスの愛、その裂け目に塗り込まれた癒し薬のようなイエスの愛を、どうかそういう人々のために、あなた方自身の思いやりで、生かしてください、与えてください、示してください」という意味で書かれているのです。「一緒に捕らわれているつもり」で。

私たち自身は今自由でも、もし、自分が牢屋（多様な意味における獄）に入れられたら、そこで受けるであろう辛苦、困難、虐待、無情、孤独、絶望、あるいは死の恐怖を、今囚われている仲間たちのために、出来る限り心に受け留め、思いやり、それを、癒され、慰められ、救われる主が支え導いてくださるように、日々祈り続け、心を向けていきなさい、と勧めています。

この「思いやり」ということは、単に可哀相だなと思う同情ではない。その人のために心を裂くこと、その痛みを自分の痛みとして共に担うことなのです。その一つのシンボライズされた形が、ある意味、あのイエスの十字架の上での「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」という叫びです。

もう駄目だ、これ以上は歩けないという絶体絶命の状況に立たされた人が「神様、何でこんなことを私になさるのですか?!」と叫び声を上げる、その痛みを共に祈り、担い合うのです。神は、そういう私たちの痛み、苦しみ、悩み、呻きを直にお聞きくださいます。

そして、そのすべてをイエスも体験なさり、御自分の身に担ってくださった。そのことによって赦されていることを思い起こした時、イエスは私たちと同じ肉体をもって十字架の苦しみに耐え、その苦しみを乗り越え、乗り越えられた苦しみの真実を通して、救いを完成してくださったのであるから「あなたがたもその苦しみを彼らと共有することによってイエス・キリストと共に生きている喜びを体験しなさい」という御勧めが現れるのです。

まとめて考えてみれば、

①節、②節、③節は、私たちの教会生活、社会生活を方向づける一つの大事な言葉が、大変短い言葉の中に集約され表現されていると考えられます。

第④節

結婚はすべての人に尊ばれるべきであり、夫婦の関係は汚してはなりません。
神は、みだらなものや姦淫するものを裁かれるのです。

「結婚はすべての人に尊ばれるべき」であります。尊ばれる状況になかったら、辛く残念ですね。結婚は本当に重大な問題であって、「(神によって引き寄せられた)二つの異なる人格が、新しい目的に向かって一つの家庭を構築しようとする営みを開始すること」それが結婚です。

神は、結婚が大切だから男と女をお造りになったということ、創世記ではちゃんと説明されています。ですから、その結婚は、もっと真剣に捉えてゆかねばならないものであると言っているのです。²⁴⁵

パウロの思想には先程触れましたが、実はパウロは生涯独身だったのです。そして彼自身手紙の中で何度も何度も書いていることは、「終わりの日が近いから、もしできることならあなたがたも私のものであってほしい」ということです。その一部分を取り上げて、パウロは結婚否定論者なんだと言っている人がいますが、決してそうではないのです。コリントの信徒への手紙では「自分を抑制できなければ、神が定めてくださった結婚をきちんとしなさい。神の祝福がそこにあるのだから家庭を大事にしなさい」と言っているのです。その点で、パウロは結婚を軽く考えていたわけではないのです。

「教会は結婚式をきちんとやってくれるからキリスト教式で結婚したい」とよく言われますが、キリスト教は結婚式のためにあるのではなくて、結婚式があなたがたの心を打つとすれば、それは「キリスト教がもっている結婚観の中に心を打つものがある」からです。ですから、そのことをしっかり勉強して、「結婚とはこうなのだと分かるようになってから、式を挙げなければ。」と言います。よく、結婚と結婚式を混同したり、結婚とは入籍することだという法律的な解釈だけで事を進めたりすることがありますが、それは、キリスト教の結婚観とは随分かけ離れています。

特に七十人訳の聖書では、「夫婦の関係は汚してはなりません」という言葉が「夫婦の寝床を汚してはなりません」と書かれています。

寝床を汚すということは、不倫を冒すこと、あるいは、セクハラを冒すことであって、結婚は、神の祝福の中で神に見守られているという現実立ちながら、感謝と喜びと畏れをもって夫婦二人の愛の生活を押し進めてゆくことでなければいけないと、ここでは告げているのです。

ある意味では家庭問題にまで立ち入って、この手紙の最後の部分は、私たちに向かって人間同志の関わり方を質しています。「それが正しい信仰生活なのですよ」と言うのです。

ですから、信仰を持った人間同士が家庭を形成することは、「イエス・キリストの御許しがあり、神の憐れみ、神の愛があって、その恵みを証ししてゆくこと」です。その神の恵みの具体的な証しのひとつとして、子どもが与えられ、その子どもは神からの言わば「御預かりもの」として、畏れと慄きをもって育て上げてゆく責任が課せられているのです。以上のような奨励が、この短い言葉の中にきちっと詰まっているわけです。

また、結婚の問題は、不潔な生活をしないようにとか、不品行をしてはなりませんという、いわゆる禁止条項を挙げるだけではなく、むしろ「積極的な神の愛を生きる姿勢の中で、不潔、不品行は当然、全部取り払われ、乗り越えてゆかねばならないのですよ」と述べているわけです。

そして、これから結婚しようとしている男女双方に対しては、大変強い勧告が書かれています。というのは、夫婦生活、家庭生活は、「教会での神の前に膝を屈めるという祈りの姿勢とは大分違うものがある」と考える人がいるのですが、ここで著者が言っているのは、夫婦生活、夫婦関係は、「祈りの生活と根本的に矛盾してはならない、一致していなければならない。また、それが一致できるような家庭を育まなければならない」ということを強調しているわけで、とても大事な勧めだと思えます。

この第④節だけ取り上げて、このことを中心に聖書のお言葉を引きながらお話しても、一時間位お話ができます。それは一節一節が、皆一つの説教になっているからです。その説教は、「あなたがたはキリストに愛されており、キリストは御体をもってあなたがたのために御苦しみになられたのだから、あなたがたはその御愛の中をしっかりと生きてゆきなさい」という大きな励ましを背景に、語られているわけです。

第⑤節

金銭に執着しない生活をし、今持っているもので満足しなさい。

神ご自身、「わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにはしない」と言われました。

この⑤節の言葉の前半と後半を、この世の常識的な発想で聞くと、関連の無いようなことを言っているように聞こえますが、実は前半の勧めをするために、この後半の言葉が裏打ちしているのです。

「執着しない」と訳されている言葉、この言葉もすごく面白い言葉です。アフィラルギュロスという言葉で訳されています。アフィラルギュロスを分解しますと「アという否定詞と、フィレオー愛するということと、アルギュロスという金銭、お金という言葉とが連結してできた言葉」なのです。

金銭に執着しない生活、言い換えれば、金銭は愛される価値を持たない、さっき言ったフィレオーは価値あるものを愛するわけですから、愛さないというのは価値のないものだと逆に言おうとしているわけです。

フィレオーというのは、アガペーに比べ低次元の愛などとよく言いますが、私たちが持つ最高の愛は、ある意味フィレオーであり、フィレオーの愛はすごく大切だと、13章では告げているのです。

「どんな人をも価値ある者として愛し、価値ある者として仕え、価値ある者として受け止めなさい」という、今まで書いて来た④節までの歩みに対して、⑤節では「金銭は価値がないから愛するに値しない」と言っているのです。すごく面白いですね。

価値がないから愛さなくてもいいとは、「金銭がむしろマイナスの意味をもつことが多いから、そういうものに拘束されないで生きて行きなさい」と言っているわけですね。そのお金とか富が、誤った独立心を起こさせてしまう。「お金さえあれば何でもやってゆける、世の中すべて結局は金だよ」という発想を持たせてしまう。

この発想を裏返して言うに「だから神様なんていない」ということに繋がってゆきま

す。これが拝金主義、経済万能主義という人類共通の負のイデオロギーとなるわけです。お金は、そのように人間の正常な生き様を崩壊させて、人間を駄目にしてしまう、「人間を（神に創られた）人間でなくしてしまう」から価値がないのです。お金や富がその人をこの世に釘づけにしてしまう。別な言い方をすれば、見えない世界あるいは来たるべき神の国を待つことをさせなくしてしまう、十字架ではなくこの世に執着させてしまう力を持っているのです。

ローマの諺の中に、「お金は海の水のようだ」というのがあります。お金は必要なだけでいいのに、欲しいと思ってそれを手に入れると、もっと欲しくなり、止めどなくお金が欲しくなって、結局、自分の実体が保てなくなる。だから「お金は海水のように怖いものなんだ」とローマでは諺にしているのです。

そして、随分昔に書かれたこの手紙は、そのことをきちんと伝えているのです。

「あなたがたは満足が出来ないからいけない。いつでも不満足の中に生きているから、そういう羽目に陥るのだ。今持っているもので満足しなさい。」これが実はすごく大事なことなのです。

「今持っているもので満足しなさい」という言葉を（上滑りで）読んだ人から、「だからキリスト教というのは敗北主義なんだよ、現状維持がせいぜいなんだよ」などと批判されるのですが、「今持っているもの」というのは、なにも物質的なことだけを言っているのではないのです。

何が起ころうと、どんな状況になろうと、あなたに与えられている恵み、今あなたに与えられている神の愛、今あなたに注がれている神ご自身の深い御思い、十字架の上でああなたの命を贖ってくださったイエスの血潮そのものを、あなたがたが何よりも大事なものとして「これがあれば大丈夫だ」と、一切のものをかなぐり捨てても、それをしっかりと保持しつつ歩んで行くこと、それが「今持っているもので満足する」ということなのです。

「わたしは決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにはしない」と仰つた神の愛、それをあなたがたはお受けしているのだから、「その御愛にすべての力の源、生きる根拠を置いて、すべてをかけて生きてゆきなさい、もうそれだけで十分だと本当に信じて生きてゆきなさい」と言われています。

イエスは山上の教え（マタイ6章33節）で言われました。「先ず神の国と神の義を求めなさい、そうすればこれら一切のものはそれに添えて与えられます。」と。

（マタイ6章25節から34節の教えは、森容子先生に説教をお願いし末尾に記しました）

第⑥節

だから、わたしたちは、はばからずに次のように言うことができます。

「主はわたしの助け手。わたしは恐れない。人はわたしに何ができるだろう。」

何が起ころうと、どんなことが起ころうと神が私たちと一緒にだから大丈夫、正にパウロがローマの信徒への手紙で言っている言葉と同じですね。「神もし我等の味方ならば、誰か我等に敵せんや」と。神はすべてに勝利なさっているのだから、敵になるものはいない、というあの宣言です。

私たちの信仰は、そのように私たちが生きているという様＝姿ですね、そのすべてを包んで、しかも支えて運んでくれる力を持った神を信じているということ、私たちは確信とし、誇りと成して生きてゆこうではありませんか。それを確認し合いながら、助け合い、支え合い、励まし合って進めてゆくのが「教会の交わりなんです」と言っているのです。

主が御自分のすべてを捨てて愛してくださった、その価値ある対象者である、教会のすべての兄弟姉妹、また、教会におけるすべての神の出来事と関わっていく。そしてイエスが下された愛をそこで深く感じ取りながら、その愛を実践して生きてゆく。そのことによって、絶えず満ち溢れる喜びを持ち、これ以上はない主の幸いを経験しつつ、人生を豊かに生きることができるのです。

そんな呼びかけを、この13章の①節から⑥節で為しているのだと思います。ここまでが13章の最初の部分、信仰を有する者ないしは教会の民に対するお勧めなのです。

そして第⑦節からは「指導者たちとの関係」に移っていくわけですが、この辺はまた次の時にご一緒に学んでまいりましょう。 （1998年6月13日）

「思い悩みの者よ、安心なさい」

マタイによる福音書第6章②⑤節から③④節：

日本基督教団峡南教会

牧師 森容子

以前、祈祷会で「謙遜と高慢」ということについて学んだことがありました。私たちの社会では「謙遜」と言うと、日本人の美德の一つであり、控えめで、つつましやかなさま、殊に、自分の能力・価値などを低く評価する奥ゆかしいさま、などと評されます。

ですから、重大な頼まれ事やお役目を仰せつかった時などは、たとえ心中では「待ってました～」というような場合であったとしても、「私などには荷が勝ちすぎていると存じますので、どうぞ、より相応しいお方をお探しくださいます。」などと一旦お断りするのが、謙遜な方の常道と言えましょう。

けれども信仰的には、頼まれ事を婉曲な形でもお断りする態度は、「謙遜」ではなく、むしろ「高慢」にあたるのです。ですから、それを、人からではなく神様からの頼まれ事と承知して、「かしこまりました。お祈りしつつ、私にとって出来る限りの備えをして臨みたいと思います。」と申し上げるのが、いとも「謙遜な態度」と言えましょう。

一步引き下がるのではなく一步前へ進み出て神様にお仕えするのが、信仰的な「謙遜の構え」なのです。

では、本日のテーマ：思い悩みは、謙遜と高慢のどちらでしょうか？

目の前の困難な事象に対処できる自分自身の力の無さ、守備範囲の狭さ、持ち駒の不足、先々への備えの不十分を自覚して、ああ、どうしよう、どうしたらいいだろう、と思い悩む・・・これは一見、「謙遜な態度」のようです。が、実は、これも信仰的には「高慢」にあたるのです。なぜかと言えば、神様の御手を軽んじているからです。

主を信じ委ね切れていない態度だからです。自分の力や知恵でどうにかしよう、自分の経験則や他者に頼ろうとするからこそ、思い悩みが生じ、溺れかかるとはなす。・・・

かく言う私も恥ずかしながら、時折「思い悩み」に落ち込んでしまいます。そうして、かなりアップアップもがいた末に「ああ、神様！」と、やっと気づきが与えられるのです。

では、本日のテキストに入りましょう。

②⑤節

だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

以前この箇所を、山梨英和学院の礼拝で説教させて頂いた時「皆さん、ここに書かれてある『何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか』という思い悩みは、お部屋の洋服ダンスを開けて、ずらーっと並んでいるドレスの中から「さあ今日は何を着ていこうかしら、迷ってしまうわ」というような選択肢の思い悩みではありませんよ。」と言いますと、会堂に笑いが生じました。・・・因みに、ユダヤの格言には「籠の中にパンを持ちながら、『明日は何を食べようか』と聞くのは、信仰の薄い人である。」というのがあります。

イエス様の時代の「思い悩み：メリムナ」というのは、あす食べる物が、あす飲む物が、あす着る物が、足りずに心細く、命の不安に震える人々、働けど働けど厳しい税の取り立てに日夜曝されている人々の深刻な現状です。

こんな思い悩みに、上から目線で「あなた、その思い悩みは高慢ですよ」とは、とても言えませんね。でも、こうした思い悩みは、せっかくの主^に在る喜びを、衣食住の心配の充満で、すり減らしてしまっているのです。

そんな人々に主が「食べ物よりも大切だ」と仰る「命」とは、主が下さる<永遠の命>のことであり、主が「衣服よりも大切だ」と仰る「体」とは、主が下さる<復活の体>のことでありましょう。視線を足元の現実だけに置いて悩むのではなく、もっと前に、もっと上に、神様のおられる天国へ差し向けて、闇の世が明けてくるのをひたすら信じるのです。そうすれば、人生が行き詰まることは決してありません。

②6節

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。

アーメンですよね。こんな気づきが表れ始めたら、うつむいていた人々も少しずつ元気が出てまいります。「そうだ！私たちは、空の鳥よりも価値のある者なんだ」と。そんな自分たちを、神様は養ってくださらないはずはないと。

そして、この「空の鳥」には別の意味も隠されています。「空の鳥」とはセフォリスというローマ帝国直轄の都市の名前を連想させるのです。このセフォリスは、貴族たちが奴隷にかしずかれて、優雅に暮らしていた町です。彼らは無論、種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めることも自分の手ではしませんでした。主は、ガリラヤの貧しい農民・漁民たちに向かって、「あなたがたは、セフォリスの貴族よりも価値があり、貴い人々なのだ。」と、力づけられ、励まされたのです。

②7節

あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。

この聖句を文字通り受け取りますと、思い悩んでいるのは、寿命を延ばしたい高齢者の声のように思えます。しかし、違うのです。「寿命をわずかでも延ばす」と訳されている御言は、原典では「1キュビト（約45cm）伸ばす」という言葉です。つまり、思い悩んだからと言って、「身長45cm分の寿命を延ばすことはできませんよ」と主は言っておられるのです。

では、身長が45cmも伸びる時期とは、いつでしょう？そう、赤ちゃんが生まれてから、3、4歳になるまでの期間ですね。赤ちゃんは身長約50cmで生まれ、1歳までに約30cm伸び、4歳までには約50cmも身長が伸びますから・・・。こんなに身長が急激に伸びる時期は、他のときにはありません。

イエス様の時代は、生後すぐに亡くなった子を除き、10歳まで生きられる子どもさん

が半数しかいなかったとのこと。衛生状態が悪く、良い薬も十分な栄養も摂れぬ劣悪な環境のせいでしたが、本当に可愛い盛りの幼子を亡くすほど悲惨なことはありません。

でも、その悲しみは、嘆きや思い煩いが解決してくれるわけでは決してありません。そこに、最初の㉔節の主が授与される<永遠の命>や<復活の体>の福音が生きてくるのです。そこに、何ものにも比して大いなる御励まし、海よりも深い御慰めがあるのです。

私も、二人目の子を産まれる直前に亡くし、悲しみに暮れて過ごした時期があります。道で妊婦さんや赤ちゃんを抱いた方を目にするのも辛く、そんな私の様子を見かねて、当時シアトルに駐在していた義姉夫妻が一か月間2歳の長男と私を自宅に招いてくださり、優しい愛情で包み、労ってくださいました。

ですが、私の心が真から慰められたのは、その後、<永遠の命>と<復活の体>の福音に触れ、その子、逸と名付けた亡き息子とも、きっと御国で出会えるという望みを、強く強く抱いた時です。そして、一か月間を共に過ごした義姉は、帰国して暫く後に、洗礼に与かりました。

㉔節から㉖節

なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。

ここまで主が語ってこられても、聞いている人々の間にはまだ首を傾げている人々がいたのではないのでしょうか。それで主は、㉔節での空の鳥の譬えを今度は野の花の譬えにバージョンアップされ、熱弁を振るわれています。

野の花としては、赤いけしやアネモネが挙げられますが、これらの花々は、パレスチナの丘陵にて一日しか咲かない花でありました。けれども、たったひと日の開花を、ユダヤ史上最も煌びやかな栄光をまとっていたであろう王ソロモンを凌ぐ「美しさ」で彩ってくださる神様、枯れれば翌日は焚きつけにされるだろうその花にさえ、細心のお心を傾けてくださる神様、そのお方が、人間に深い配慮をなさらぬはずは絶対がない、と主は力説されるのです。

最後には止めを刺すような「信仰の薄い者たちよ」という御言が置かれていますが、これも決してきつい断罪のような口調ではあられず、どうか気づきを持って欲しいという、深い憐みに真実の御愛を込められて、目の前の人々に告げられた御言であられましよう。

㉖節㉗節

だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。

真実の信仰に立っていない異邦人は、この世における満足（食べ物、飲み物、着物に代

表される生活の満足)を第一義的に求めます。しかし、私たちの父なる神様は、私たちの必要をことごとくご存じで、必要な物は必要なだけ、過不足なくお与えくださいます。

そこに、もし不足を言い立てるとしましたら、神様のお心を無視しているという、それこそ「高慢の罪」を犯すということになります。そうならないためには・・・

③節

何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。

そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。

「神の国」とは、ローマ書14章17節に「神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。」とあります。

一方「神の義」とは、ローマ書3章25-26節に「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。・・・この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。」とあります。

つまり、神の義とは、罪を償う供え物となさったイエスを信じる者を義となさることです。

以上をまとめますと、人生の中で、何よりも探し求めなければならないのは、「聖霊によって与えられる義と平和と喜び」からなる<神の国>と、「神様が罪を償う供え物となさったイエス様を信じること」により与えられる<神の義>であるということです。

ここで、神の国と神の義を求めていく延長上で、主が「そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」と仰っておられますが、「これらのものはみな」とは、いったい何でしょうか？（お考えになってみてください。）

前節で主は、衣食住の悩みに関し、「それは異邦人が切に求めているものだ。」と仰っていますね。ですから「これらのものはみな」とは、衣食住の満たしではありません。では、何でしょうか？（悩んでみてください）

答えのヒントは、冒頭25節の「自分の命のことで何を食べようか、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物より大切であり、体は衣服より大切ではないか。」にあります。（もう一度、冒頭のメッセージを思い出してください。）

つまり、食べ物より大切な自分の命とは「御国に生きる永遠の命」であり、衣服より大切な自分の体とは「キリストをまとった聖なる復活の体」であります。ですから、「これらものみな」とは、端的には<永遠の命>と<復活の体>というのが、答えです。

（皆さん、当たりましたか？）

④節

だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。

この「明日自ら」とは、私たち其々の明日の日を設計され、その日の設計図を実行に移してくださる、主ご自身のことであります。そのお方が私たちに代わられ、私たちの明日のことを

十分に思い悩んでくださるのですから、視野が狭く器量の小さな私たち自身が思い悩む必要は、全然ありません。自分で思い悩めば、反って、明日の日がこんがらがってしまいます。

ですから、明日の日の思い患いのすべてを主にお委ねし、私たちは、主が御計画され、主が私たちに与えてくださる一日一日を、精一杯、心一杯、主と共に味わいながら、ご安心して、喜んで、歩んでまいりましょう。

愛と真実の主は、今、あなたと共に、生きておられます。

主が私たちに与えてくださる一日一日を、精一杯、心一杯、どんなことも主と共に味わわせて頂きながら、

安心して喜んで、備えられた御国への道を歩んでまいりましょう。

写者あとがき

今回も森容子先生には大変なお時間をいただき推敲していただきました。その上に今回に関連する説教をお願いいたしました。松山先生の教えを受けられて明解で丁寧に、かつ、重要なところを原典に照らして深い意味をも説き明かしていただきました。感謝でございます。

松山幸生先生の解き明かしを写書して熟読して、自分の理解を短くまとめてみました。13章は後の加筆という説もあるようですが、「キリスト者にふさわしい生活の勧告」との小見出しの12章⑭⑮節を引き継いでいるようにも読めます。

12章⑭すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。

聖なる生活を抜きにして、誰も手を見ることができません。

12章⑮神の恵みから除かれることのないように、また苦い根が現れてあなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚れることのないように気をつけなさい。

13章⑤節までは、聖書の倫理的勧告として読めます。

①兄弟愛＝フィラデルフィアを説明するのみならず、松山先生はイエス・キリストの愛、アガペーをも説明されキリストの愛の広さ、深さ、重さを私たちに執拗なほどに語っています。

6章⑩節「神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません。」（だから、兄弟たち、互いに支え合いなさい）

②節、旅人をもてなすこと、ユダヤ人であれ、異邦人であれ、旅人をもてなす事は重要な兄弟愛の発展拡大であると考えます。（日本の四国にも同じような風習があります）

今日の私たちは「主の日の礼拝」に向かう旅人であり、旅の途中で遭遇する苦労や患難は多様です。教会こそ旅人をもてなさなければならぬと説かれていると思います。

（今尚、キリストを信じ礼拝するゆえに、婚家を追い出されるケースもある。）

③節、投獄されている人への配慮、ここではキリストを信じる信仰ゆえに迫害され、投獄されている人です。その人たちへの思いやりを、自分も投獄されている者と同化させて配慮をなさいと教えがなされています。兄弟愛の更なる深耕です。

④節、結婚関係を尊ぶこと。

人間関係の基礎、根底のことについて具体的に記しています。十戒の第7の戒めです。淫らなものは裁かれます。現代の風潮をどのように理解すればいいのだろうか。

⑤節前半、金銭への執着しないこと。「お金は海の水のようだ」と、あのローマの諺にもあるぐらいすべての人を虜にする麻薬のようなものです。

「だれも、二人の主人に仕えることができない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富と使える事はできない。」「重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マタイによる福音書6章②④節、

「今持っているもので満足しなさい」なぜそのようなことが言えるのでしょうか。

それは

5節後半、「わたしは決してあなたから離れず

決してあなたを置き去りににはしない」との神の保証があるからです。

「あなたがたの天の父は、これらのものがみな、あなたがたに必要なことをご存知である。何よりもまず、神に国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の労苦は、その日だけで十分である。」「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」（マタイによる福音書6章⑳-㉔、㉑）

旧約聖書においても次のように語られています。

「あなたの神、主は、あなたと共に歩まれる。あなたを見放すことも、見捨てられることもない。」「主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる。主はあなたを見放すことも、見捨てられることもない。恐れてはならない。おののいてはならない。」（申命記31章⑥、⑧）

神への深い信頼が、金銭への執着などの人の貪欲さと物理的生活の基盤への不安を克服する道を示している。（説教黙想アレティア・「ヘブライ人への手紙」p191より引用）

⑥節、「だから、わたしたちは、はばからず、次のように言うことができます。

主はわたしの助け手。わたしは恐れない。人はわたしに何かできるだろう。」

これは詩編118編⑥「主はわたしの味方、わたしはを恐れよ。人間がわたしに何をなしえよう。」の引用です。

「この詩編の引用によって、著者は（確信を持って）、私たちが抱えている将来に対する恐れや生活の不安からくるあらゆる貪欲さ、金銭への執着や性的乱れとして現れる貪欲さに対して、「神が助けてくださる」という神への信頼と確信をもっていくことを勧めようとしているのである。神への大きな信頼はあらゆる不安と恐れを取り除く。だから、様々な世の事柄の中で信仰の危機にある時にこそ、神への信頼を強める必要があるのである。」

（説教黙想アレティア・「ヘブライ人への手紙」p191より引用、文中の挿入は写者）

このように要約して理解を深め、自戒と反省、そして悔い改めて、人生の最終コーナーをまだまだ生きていこうと決意しております。

2023年11月1日

老いゆけよ、我と共に！ 最善はこれからだ。

人生の最後、そのために最初も造られたのだ。

我らの時は 聖手の中にあり

神 言い給う

「全てをわたしが計画した。青年はただ その半ばを示すのみ

神に委ねよ。全てを見よ。しかして恐るな！」と。

（ロバート・ブラウニング作 手島郁朗）